



東北大学

平成20年11月25日

報道機関 各位

東北大学薬学研究科

冬期に出産予定の妊婦では妊娠期間中の血圧上昇が大きい

東北大学大学院薬学研究科の今井潤教授らのグループは、東北大学大学院医学系研究科（松原洋一教授・岡村州博教授）・スズキ記念病院（鈴木雅洲院長・東北大学医学系研究科名誉教授）との共同研究を通じて、正常血圧妊婦における家庭血圧推移の季節変動を明らかにしましたのでお知らせいたします。なお、本研究結果は、国際高血圧学会誌 *Journal of Hypertension* 12月号に掲載予定です。

「妊娠高血圧症候群」は、以前より「妊娠中毒症」と呼ばれ、妊娠後期に発症する事が多い妊婦特有の病気です。重症になると、「子癇」と呼ばれるけいれん発作や、脳出血などの合併症が起これ、母子ともに生命の危機に瀕することから、その早期発見はきわめて重要といえます。現在、我が国においては、毎年約100万件強の出産があり、その10%弱に妊娠中の高血圧が認められ、現在でも妊娠中の血圧測定は妊婦・新生児の健康状態の把握に重要な役割を果たしていると考えられます。

一方、古くから、妊娠高血圧症候群や子癇発作は冬期に多いことが知られており、本研究では妊婦における血圧値の季節変動に着目しました。また本研究では、より長期間にわたって血圧を測定できる家庭血圧に着目し、妊婦さんに出産後まで継続的に血圧を測定して頂きました。

本研究は、スズキ記念病院にて出産を行った妊婦さんのうち、家庭血圧測定にご協力頂いた109人が対象です。分析の結果、最低気温が10度低下する毎に血圧値は2.5/2.5mmHg上昇していました。また、1月に出産する予定の妊婦さんでは妊娠期間中を通して血圧が12.8/12.5mmHg上昇する一方で、7月に出産する予定の妊婦さんでは血圧が3.1/3.0mmHg程度の上昇に留まることがわかりました。

冬期出産の場合には妊娠期間中を通しての血圧の変動幅が大きいことに注意を払い、血圧の上昇が明らかであった場合には早期に医療機関を受診する必要があるものと考えられます。

(お問い合わせ先)

東北大学医学系研究科 遺伝病学分野

日本学術振興会 特別研究員PD 目時弘仁

電話番号：022-717-8590

東北大学薬学研究科 医薬開発構想

准教授 大久保孝義

電話番号：022-717-8590